



テーマ リベラルアーツ教育は日本で実るか？

武内 隆明

山梨学院大学 国際リベラルアーツ学部 (iCLA) 学部長補佐

「国の根幹は教育である」

とよく言われる。

最近、日本のビジネス界でも「リベラルアーツ」という言葉を耳にする機会が増えてきた。ビジネス誌でも、度々、表紙を飾っている。

(最近では、週刊ダイヤモンド「プログラミング&リベラルアーツ」2018年5月12日号)。

しかしそれは、まだ日本では本当の意味の「リベラルアーツ教育」が正確に理解されていないからではないか。

アメリカでトップ・リベラルアーツ・カレッジと言われている大学を、アメリカで3番目の発行部数を誇る時事解説誌US ニュース&ワールド・レポートの直近(2018年)のカレッジ・ランキングから抜粋してリストアップしてみた。(表①)

トップ10 リベラルアーツ・カレッジ

ランキング	College Name	大学名	所在地 (州)	学部入学 学生数	創立年
2018					
1	Williams College	ウィリアムズ・カレッジ	マサチューセッツ	2,061	1793
2	Amherst College	アマースト・カレッジ	マサチューセッツ	1,836	1821
3	Wellesley College	ウェルズリー・カレッジ	マサチューセッツ	2,508	1875
3	Swarthmore College	スワースモア・カレッジ	ペンシルベニア	1,600	1864
5	Bowdoin College	ボードウィン・カレッジ	メイン	1,816	1794
5	Middlebury College	ミドルベリー・カレッジ	バーモント	2,561	1800
5	Pomona College	ポモナ・カレッジ	カリフォルニア	1,703	1887
5	Carleton College	カールトン・カレッジ	ミネソタ	2,078	1866
9	Claremont McKenna Co	クレアモント マッケナ・カレッジ	カリフォルニア	1,338	1946
10	Davidson College	デイヴィッドソン・カレッジ	ノースカロライナ	1,810	1837

[出所：US News & World Report]

I リベラルアーツ教育を学んだ著名人

リベラルアーツ教育を学んだ著名人は国内外で枚挙にいとまがない。国内で古くは教育関係者だと同志社大学の創立者の新島襄（アマースト大）や、同じく津田塾の津田梅子（プリンマー大）、

札幌農学校（現北海道大学）を開校したクラーク博士（アマースト大）は有名で、内村鑑三（アマースト大）や永井荷風（カラマズー大）（敬称略、以下同）。

意外と知られていないのが孫正義（カリフォルニア州ホーリー・ネームズ・ユニバーシティ）。リベラルアーツ教育を英語でしっかり2年間ほど学んだ後、UCバークレー校に転校している。

同種の業界では、インテルの創業者のロバート・ノイズ（グリネル大）、2年間で転校してしまっただがアップルの前CEO スティーブ・ジョブス（リード大）。

政治の関係では、ヒラリー・クリントン（ウェルズリー大）、ジョージ・H.W.ブッシュ大統領の妻でありジョージ・ウォーカー・ブッシュ大統領（とフロリダ州知ことジェブ・ブッシュ）の母であるバーバラ・ブッシュ、元女優で第40代大統領のロナルド・レーガンの妻ナンシーの二人は、米国屈指の名門女子リベラルアーツ・カレッジのスミス大の同窓である。

大統領本人も、リベラルアーツ・カレッジは数多く輩出している。途中で転校したが、最近の例ではオバマ大統領も、西海岸のオクシデンタル大で大学生活の初めの2年間を過ごしている。

興味深いのは、それら卒業生は、当時の「初めて」に挑戦し立ち向かって成功したパイオニアが多いことである。自分自身もまだ良く知らない新しいことに、偏見を持たず、果敢に挑み続ける「心身共にタフなチャレンジャー」が多いのである。

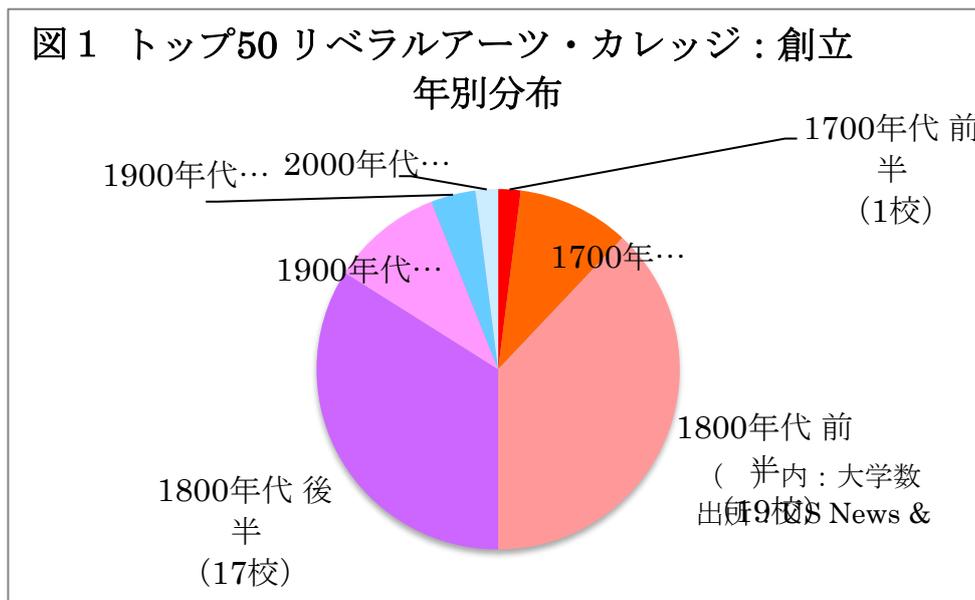
上記著名人も、毎年数千人の卒業生を送り出すユニバーシティ（総合大学）と異なり、毎年数百人という少人数の卒業生数しかおらず、特定の職業に直結した専門教育を敢えて絞り込まないのを良しとするリベラルアーツ・カレッジ卒業生が、卒業後の活躍の場が極めて幅広く分散され、しかもそれぞれの分野で超一流のレベルに達している理由は何であるかを探ってみたい。

II リベラルアーツ教育の目標

Wide/Balanced/Connected

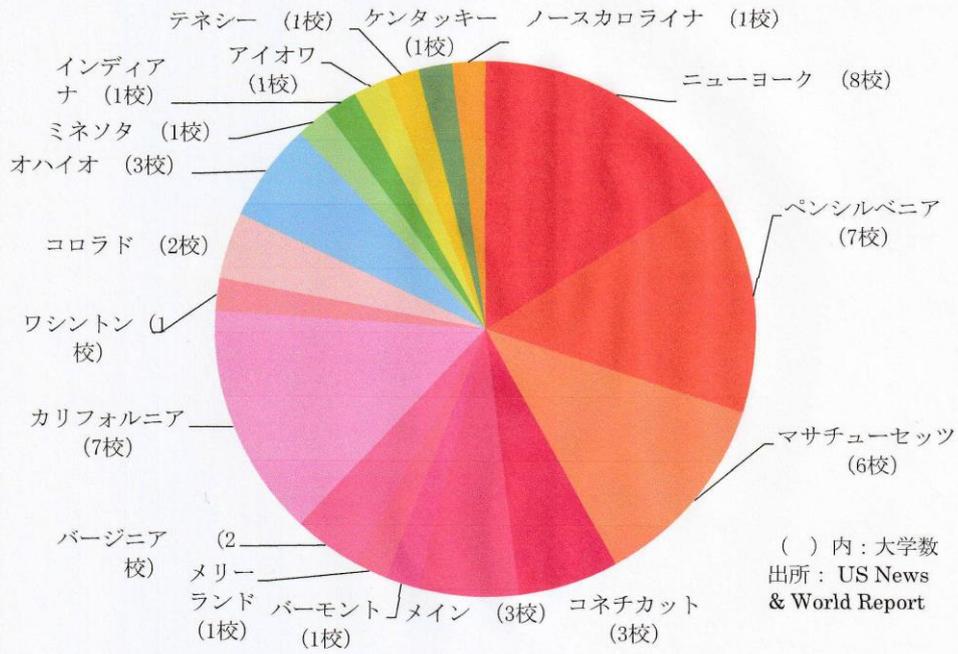
まず、現在のアメリカのトップ・リベラルアーツ・カレッジの現状をざっくりと分析してみた。

上記のアメリカの時事解説誌 US ニュース&ワールド・レポートの直近(2018年)のリベラルアーツ・カレッジのラインキングの上位50校の分析を行ってみたところ、84%の大学が1800年代以前に創立されている。（図①）



さらに、その所在地は60%以上が東海岸にある（図②）。

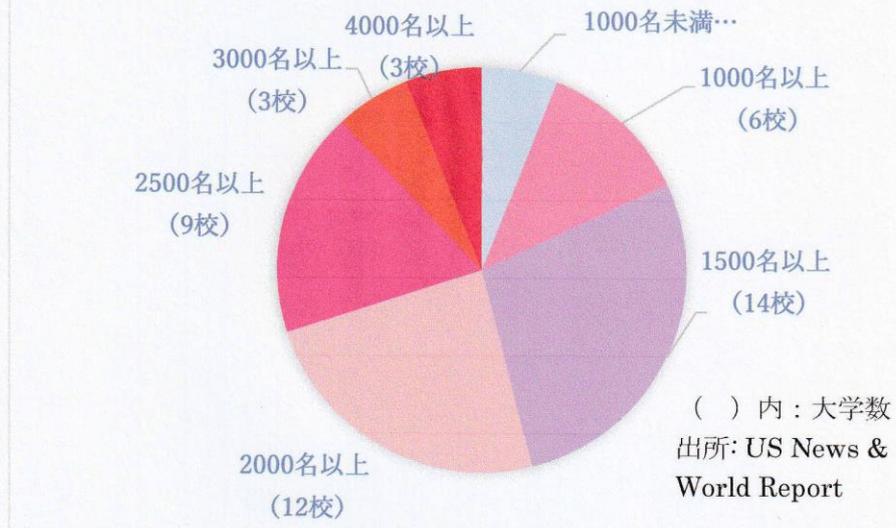
図2 トップ50 リベラルアーツ・カレッジ：所在地分布



1800年代以前に創立された大学の内、東海岸にある大学は76%と、かなり高い重複度である。そもそもアメリカの大学は、1600年代にイギリスから入植してきた清教徒によって、東海岸で私塾のようなリベラルアーツ・カレッジから始まったと言われる由縁である。

(逆に、興味深いのは、1900年以降に創立された大学が全体の16%に過ぎないのにもかかわらず、その内、63%が在カリフォルニアであること。) 大学の規模も、学部入学生が4,000人を超える米国士官学校3校を除くと、3,000人を超えるのが6.4%のみで、87%が1,000人以上2,000人台と、ユニバーシティ(総合大学)と比較してかなり小規模。ユニバーシティの代表格であるアイビーリーグ8校の平均学生数は、8,000人弱である。(図③)

図3 トップ50 リベラルアーツ・カレッジ 学部入学生数分布



たいていのリベラルアーツ・カレッジでは、学生と教授の比率が10対1以下、クラスによっては3対1というところも高学年の授業ではそれほど珍しくなく、日本の有名大学にありがちなイメージのマンモス授業はほとんどない。

筆者の母校、ウィリアムズ・カレッジは、「Tutorial」システムが有名で、学生二人ひと組になって教授から2対1で指導を受ける。このように教授から直接指導を受けながら独自の研究をする学生が全体の4割以上にのぼることも、それだけの指導体制が整っていることを裏付けている。

よく「自分は理系か文系に進むべきか分からない」と進路を悩む高校生の声を聴く。

憂うべきは、「数学が嫌いだから」と言う理由だけで、文系を選択してしまう生徒も少なくないらしいことだ。

文系か理系か進路を決めかねている学生には、「幅広い」リベラルアーツ教育が向いている面はある。教授と密に相談しながら、一緒に人文科学、社会科学、自然科学、芸術などを横断的にいろいろな科目に挑戦していき、少しずつ、自分が学びたいことを発見していくのがリベラルアーツの教育方針なのである。

特定の学問に偏らず、じっくりと自分の興味を見極め、それに応じて幅広く学べるのは、確かにリベラルアーツ教育の特徴の1つである。通常、専攻は2年生が終了する頃までに決定すればよく、場合によっては、一度決めた専攻を変更することも可能である。

そもそも専攻の必須要件がそれ程厳格でないので、筆者のように、ダブル・メジャーとって、経済学と心理学の両方を専攻することもできる。

しかし「『幅広く』いろいろな科目に挑戦する」ということは、決して「数学が嫌いだから、理数系は一切取らない」ということでは全くない。逆に、ある程度「バランス」のとれた、最低単位の必須教科が「幅広く」用意されている。

「意外と自分でもできる!」とか、「思ったよりも面白い!」と目からウロコのな発見こそ、リベラルアーツ教育の目標の1つであろう。

逆に、「どうしても上手くいかない」苛立ちや積み重なる失敗経験や、そんな苦手分野の存在を知ることとも将来の人生で必要不可欠な学びである。

だが、それだけでは、日本の「教養学部」と大差がないのではなかろうか。

リベラルアーツ教育で、もっとも見過ごされてきて、かつ、最重要な目標の1つは、上記のあらゆる「幅広い」分野（視野）を「バランス良く」受け入れ、そして、それらを、自分なりに「関連付ける」ことである。

特に、ますますAIやロボットが社会進出してくる時代が迫ってきている。

古今東西、人間の脳は、知識を記憶しロジカルに考える左脳と、直感的・感性的なひらめきや芸術面が得意な右脳に分かれていると言われて久しいが、現代人に、より有効利用されてきたのは左脳の方で、実際に人気のあったのは、弁護士・会計士、医者・研究者、コンサルタント・ビジネスパーソン等、コツコツと日々地道に努力して机に向かってきた職種であった。

しかし、AIやロボットが最も得意とするのも、明らかに、この左脳の分野である。

それ故に、最近の英オックスフォード大学の論文でも、「AIやロボットで約半分以上の従来の人間の仕事が奪われてしまう」と懸念されているのである。

残念なことに、昔から人の右脳の職種は、音楽家や画家などの芸術家や発明家等で、その存命中に大成している芸術家などの特例をのぞいては、ほとんどが経済的には決して恵まれず、人生的にも不安定で苦難の晩年をおくった偉人が多かった。

そこでなおさら世間一般の親（特に日本の）は、幼少の時期から特別な才能を見出され、家庭も経済的にそれなりに裕福な極めて幸運な子女以外には、大多数は自分の子供に右脳の職業に深入りし過ぎることを薦めなかった。

しかし、恐らくはまだ当分、AIやロボットではできず、人間にこそできることは、右脳の「感性」とその「ひらめき」、そして、それらと左脳の「知識」との「関連付け」業務だと思われる。

過去の具体例では、アインシュタインが、「自分の相対性理論のひらめきは、6歳の時から両親がバイオリンの練習を欠かさないようにして習慣付けてくれた賜物である」と書物に残している。

最近の例では、「理系」会社のトップ経営者だったスティーブ・ジョブスは、「自分は天才でもなんでもない。ただ、敢えて言うならば、ものごとを関連づけさせる閃きが得意なことだ」と記している。

ジョブスは上述の通り、西海岸の名門リベラルアーツ大学のリード大学に通っていて、その間、カリグラフィ（能書法：文字を美しく見せるための手法）を学んでいた。現在、世界中の社会に最もインパクトを与えたテクノロジー（理系）でも、経営学でもない。

強調したいのは「不必要の必要性」で、これは、技術革新で、すさまじい勢いで情報・知識が陳腐化してきている現在ではなおさら重要となってきた。

改めて、ジョブスの言葉でまとめて貰うと、「我々は常に、テクノロジーとリベラルアーツの交差点に立とうとしてきた。技術的にも最高のものを作りたい。でもそれは直感的でなければならない。これらの組み合わせ（関連付け）がiPadを生み出した」と。

肝心のポイントは、回り道している間の「不必要」と思われる体験を、将来「ひらめき」、間接的にも繋がらないアイデアと「関連付けられる」能力こそが、AIやロボットが現段階でまだ当分の間はできないことなのであろう。（前述の「バイオリンと相対性理論」や「カリグラフィとiPad」の例）

そして、回り道をしながらも日々ポジティブに捉えるメンタリティ（熱い心と冷静な頭）と、それを継続するために必要な全寮制による身体をも含む習慣化こそ、リベラルアーツ教育の根幹なのである。

III リベラルアーツ教育の根幹

(A) 「熱い心と冷静な頭」

上記で、直接に関係がないと思われるあらゆる事象を「結び（関連）付ける能力」をリベラルアーツ教育の1つの重要な目標として挙げたが、その「あらゆる」事象（今後は特に異文化をはじめとする多様化社会からの新しい視点）の結び（関連）付けに挑戦し続けるには、熱く折れぬタフな心に絶えず鍛え抜かれていなくてはならない。

最近の、海外留学や駐在などのチャンスに飢えていないと言われている多くの日本人は、中国、インドなどのアジア諸国やアフリカなどの開発途上国の若者の熱いチャレンジ精神に気がつかず（または、見て見ないふりをしているのか）、近い将来、いつの間にか「茹で蛙」になって死滅してしまうのではないかと心配される。

開発途上国の若者は総じて、現在の日本の一般の若者とは比較にならないほど”Hungry”である。だからと言って、日本の若者のできが悪いのでは決してない。

いや、義務教育の小学校から最低、中学校までは、しっかりと算数や国語などを学んでいることもあり、OECDのPISAなどの国際機関の評価では、日本の若者の学力はむしろ優秀な方である。

しかしこれが仇となり、前述のスティーブ・ジョブスのスタンフォード大学の卒業式の演説ではないが、”Hungry”だけでなく”Foolish”になることを阻害してきているのではないだろうか。

一方、日本国内外も含むグローバル社会は、iPhoneやiPadなどのハード面の急激な普及から、それらを介して、ハーバード大から東大など世界の一流大学の講義を無料で何処でも受講できるようになりつつある。もはやインターネット環境さえあれば、例えアフリカでもモンゴルでも、あるいは都内の地下鉄の中でも、それらを享受することが可能な時代になってきているのだ。

当然ながら、茹で蛙状態が許される余裕のない国々の若者達は、自らが、そして家族や親戚一同が生き残るために、極力”Hungry”で居続け、無意味な言い逃れや変に「小賢い」屁理屈など述べず、ただただ貪欲に他文化に挑んでくる。そして、そういう若者が自国などの異文化を引っ提げて、今後、ドンドン日本に入国してくるだろう。

日本国政府も2020年の東京オリンピックを念頭に、その方向の政策を推し進めてきている。

もはや、電車に乗ると「今日は、肌の色の違う人が2組もいたの！」なんてことが話題になる日は過ぎ、NYかロンドンの地下鉄のように、半分近くが外国人に占められる日がくる可能性は決して低くない。

別に生身の人間が実際に押しかけてこなくても、SNSや、スカイプなどのテレビ会議などで、上司や同僚やお客様が地球の裏側にいて、毎日嫌でも多様な価値観と接しなくては生きてはいけない時代は、業種によってはもう既に始まっている。

その時代に備えて、できれば若い内に、言語だけでは決してなく、異文化や考えもしなかった視点（ジェネレーション・ギャップやジェンダー・ギャップも含めて）を柔軟、そして朴訥に受け入れられる姿勢・習慣が必要とされる。

その度合は、1893年の幕末の黒船来航以上のピンチ度かもしれない。

その姿勢を上手く言い当てているエジソンの言葉がある。

「私は失敗したことがない。ただ1万通りの上手くいかない方法を見つけただけだよ」と。

たとえ、すぐに受け入れられなかったり、手痛い失敗をしても、エジソンは、それを失敗とは捉えずに、新たな発見として冷静に頭を切り替え、熱い心で、決して諦めずに目の前の挑戦に挑み続ける姿勢・習慣を体得していたため、いく時代も超えて世界中から発明王と敬われているのであろう。

a) リベラルアーツの具体的なカリキュラム

最近のリベラルアーツ・カレッジは、今日のグローバルな環境下、どのようなカリキュラムを組んでいるのであろうか？

より具体的にアメリカの**トップ・リベラルアーツ・カレッジのカリキュラム**を分析してみる。

まず大きなフレームワークであるが、いわゆる「学業」の分野では、大きく下記の3つのカテゴリーに分かれており、それぞれのカテゴリーから最低1教科が必須である。

1) Natural Science (数学、理科など)

2) Social Science (経済学、社会学など)

3) Art (美術、音楽など)

これらを、幅広くバランスを取りながら習得して行かなくてはならない。

実験室に日夜こもりつきりは許されず、嫌でも、社会学や哲学など、そして、音楽や演劇なども学ばなくてはならない。

そうすることによって、例えば、将来、強力な兵器を開発する科学的知識や能力が習得されても、「果たして、それを人類や社会や文化のために製造して良いものか」等、思い入れが過多にならず、バランスのとれた視点で再考できる・する人材となれるのだ。

また、各自、まだ未知の音楽、美術、演劇などの芸術分野も、いろいろと幅広く勉強でき、しかも、全くその分野の基礎のない学生でも一から学ぶことができる。

この幅広く、バランスのとれた授業を「結びつける」大きな役割を担う1つの大きな特徴が、実は、厳しいWriting コースではないかと、自らの体験を振り返って痛切に思う。

たとえ経済学の論文でも、ちゃんとした skilled English で作成することを要求される。

これは、日本の英語教育の「正しい英語」とは次元が異なる。

"Grammatically correct but somehow sounds awkward!"と突っ返され、「一体、何が足りないんだ」と、数えきれない程、忸怩たる思いをさせられた・・・。

もちろん、至れり尽くせりで、英語の先生や家庭教師的に面倒を見てくれる上級生のサポートもあったが、優しい口調ながら、厳しく彼ら/彼女らは、ただ英文を直すのではなく、全ての段落の構成から、基本的論法までギタギタに書き直しを求めてくる。ある意味、思考の整理の限界まで苦行のようにドンドン踏み込んで叩き直してくる。

確かにプライドは引き裂かれるが、しかし、だんだん精神的にもタフ、強靱になっていくのが自分でも実感できる。リベラルアーツ・カレッジでは全く珍しくない、少人数の授業でのディスカッションやグループワークとプレゼンテーションにおいて、相手に言い負かされ続けるのではなく、少しずつ、言い返し、自分の意見を相手(教授や他の学生達)に納得して頂けるまで、頭も心も鍛えられてくるのである。幅広い「教養的知識」のインプット以上に、それを整理して発信する業を無意識に体得させられるのは、正に、リベラルアーツの醍醐味である。

言わずもがなであるが、優れたアウトプット(語彙力・語学力も含む)をするためには、良質で広範囲なバランスの取れたインプットが最低条件で、あとは、どんなにストレスフルでも、ただただ書きまくり、全面的に書き直しを繰り返させられ、少しずつ精進する以外は「王道」なしかと。厳しい剣道や茶道と同様「ライティング道」に近い。

実は卒業後、教授に聞いたら、「教授同士でも横の繋がりが密で、この週に、この学生は他の科目のペーパー(レポート)が3つも重なって地獄となるな」と分かっている、「それも修業と考え、敢えて情け容赦しなかった」そうだ。

これも卒業後に聞いて驚いた話なのだが、「今は、笑い話で言えるけど」と、実は、男性学生が皆憧れていた才色兼備の女子学生も、強烈な学業のストレスで、なんと円形脱毛症になってしまったのだと。(ましてや、英語を外国語として入学する日本人留学生の挑戦度合の高さは筆舌に尽くし難く、この4年間の学生生活の仕方によっては、卒業できるまでに、人生に多大なる影響を与える程、得るものの偉大さは半端でないと確信する。)

b) 課外授業(エキストラ・カリキュラム)

上記の3つの幅広い学業のカテゴリーの科目をバランス良く履修するだけでも、かなり物理的にも精神的にもストレスフルであるが、それ以外にも卒業までに課せられているエキストラ・カリキュラムが幾つもある。

まずは、体育とワークショップである。

今回、この記事を書稿するにあたり、直近の米国のトップ・リベラルアーツ大学の卒業生など何人かにインタビューさせて頂いたが、入学式の数日後にほとんど全校、ちゃんと25mプールを往復できるかのテストがあるのは偶然ではないだろう。(大学によっては、30分間、浮いて居るだけでもOKの場合もあるそうだ。)

しかし、「泳ぎ方」は何でも良いが、「リベラルアーツ・カレッジの卒業生には、金槌はいない」とほぼ断言できるのではないか。勿論、そもそもこのような大学に合格するには、学業の成績が「オールA」だけでは到底不十分なので、申込者の多くは州大会か全米高校生大会のスカッシュやバスケットボールやアメフト部門などで優勝をしているような「文武両道」の若者ばかりである。

筆者は、感謝祭などで大学が長期休暇のため、寮を出なければいけない期間に敢えて学友の実家に転がり込ませて頂いていた。さすが全米の各州からの秀才が集まってきていたので、「この休みは、まだこの州に行ったことがないから、こいつに頼んでみよう」と、選り取り好みが可能であった。

そのお宅にお邪魔して目にした共通点の1つは、スポーツ関係のトロフィー以外に、ほぼ必ず、ディベートの楯もあったこと。しかし、それはご両親なども交えての夕食の会話などを一緒にさせて頂くと、当然と納得した。そもそも、ご両親ともトップ・リベラルアーツ大学の卒業生の場合が多かったためでもある。

(統計を取った訳ではないが、ハーバード大など大学独自のブランドかつスクール・カラーが強烈でない限り、特にリベラルアーツ・カレッジの卒業生は、その子供達をリベラルアーツ・カレッジに入れたがるようだ。ましてや、リベラルアーツ・カレッジ在学中に何人かの生涯の友達に巡り合え、その中に伴侶を見つける場合も少なくないそうなので尚更である。)

とは言え、放っておいたら勉強ばかりするガリ勉が皆無かというとは決してそうではない。そういう学生に対しては、Williams Collegeには、伝統的に非常にユニークなカリキュラムが用意されている。

それは、ウィンター・スタディと言って、9月からの秋学期と2月からの春学期の間の極寒の1月だけ、敢えて直接、通常の授業とは関係のない授業を1科目のみ(通常の履修科目数は、4科目/学期)、まる1ヵ月間取らされるのである。

そのコースは、当時、自分の頃を思い出すと、「ヒッチコックの映画を観る」とか、「ワインを楽しむ」等、おそらく、教授が個人的趣味をシェアしていたコースもあったと思う。

通常の僅か4分1の履修科目数で、しかも、かなり柔らかい題材だったが、やはりここでも、求められる知的欲求度合は決して低くなく、当然ながら、それなりに高度な英語力(特に書く力)は要求される。一方で、普段、見られない教授や他学生の一面を垣間見られ、その後の授業の雰囲気UPにも大いに貢献していた。

追記：筆者は母国語が日本語だったために、外国語の必須は免れたが、最近では、それ以外に、このご時世を反映してか、パソコンを使用したラボ(理科系、統計学系、心理学系など)を授業時間外で毎週3時間前後、理科室やパソコン室に籠ってやる必要がある課題も出されるそうである。

(B) レジデンシャル (全寮) 制度による「習慣」

もう1つ決して忘れてはいけないリベラルアーツ教育の根幹は、折れない「熱い心」と「冷静な頭」を維持する生活・人生を、一生懸命、弛まぬ努力で継続し、無理してでも「習慣化」させて体に沁みこませることである。

では、それを具体的に、リベラルアーツ教育では、一体、どのような特徴的カリキュラムを組んでいるのであろうか？

その前に、冒頭にご紹介した US News & World Report 誌が、毎年行っている大学ランキングについて補足説明する。

このランキングでは、アメリカの大学を3つに大別し、ランキングを発表している。

全米におけるトップ「総合ユニバーシティ」と、「リベラルアーツ・カレッジ」、そして、地域に根付いた比較的レベルの高い「地元カレッジ」。

今回は、全米レベルの初めの2つのカテゴリーに焦点を当てる。

初めの「総合ユニバーシティ」は、別称「リサーチ・ユニバーシティ」。

その所以は、アメリカのハーバードやプリンストンなどのアイビーリーグ大学、日本の東大、京大などの旧帝大など、世界的に名の知れた大学の最重要課題の1つは、「大学院の教授が、いかに素晴らしい研究 (リサーチ) をするか」であるからである。

よって、高校を出たばかりの大学の学部生には、大学院生が教授の代わりにマスプロ的な大教室 (1クラス100名以上) で教える授業も珍しくなく、それは致し方ないことなのである。何故なら、繰り返しになるが、教授も (大学院生も)、大学でのトップ・プライオリティは、世界に認められる論文 (リサーチ・レポート) を数多く作成・発表することと位置付けられているからである。

(ご参考までに、多くのリベラルアーツ・カレッジの学生数は図③の通り、ほとんどが3,000名以下であるのに対し、例えば、ハーバード大学の学部生数は約6,700名で、大学院生を含めると約23,000名。因みにアイビーリーグ8大学の平均、学部生で約7,700名で大学院生を入れると17,000名以上。)

一方、2番目の「リベラルアーツ・カレッジ」の別称は「レジデンシャル・カレッジ」である。

これは、筆者が卒業したウィリアムズ・カレッジやアマースト・カレッジやスワースモア・カレッジ等の古くからの東部の共学になった大学を筆頭に、現在でも女子大のウェズリー・カレッジやスミス・カレッジなどがその代表校。

上記の「総合ユニバーシティ」との最大の違いは、まず学生数の量。

前述の通りリベラルアーツ・カレッジは、一学年500名前後のみで、授業も5名から15名前後がほとんど。

そして、原則、大学院を創らないので、大学関係者の総数は、ずっとこじんまりで家族的。その違いを際立たせるのが、別称の文字通り「レジデンシャル」つまり「全寮制」であると言う環境。

(参考までにアイビーリーグ8校の学部入学生の入寮比率は75%に対し、少なくともトップ・リベラルアーツ・カレッジは95%以上でほぼ全員が寮生活を送る。)

教授は、当然の様に、自分のクラスの全学生のニックネームまで覚え、例えば、「卒業後の進路を理科系にするか文科系にするか」などの悩みも伴走して親身に相談にのってくれる。

(しかも、教授が住んでおられる場所が寮内か、または寮から近所なので、ある意味、24時間、いつでも相談可能！)

そして、友達同士の関係も特筆に値する。よくトップ・リベラルアーツ・カレッジの入学案内には、「一生の友達ができる」と謳われているが、確かに厳しいアカデミック・プレッシャーの下、敢えて文武両道を目指し、何年も、ほぼ24時間苦楽を共にした、ある意味、親兄弟よりも親しい関係が在学中、構築・持続される。

それらの友達は、リベラルアーツ・カレッジならではの幅広い様々な専攻の学生が集まっているので、絶えず、周りの友達が何を面白そうに学んで、どんな苦労しているか等を聴き、逆に、自分の状況も聴いてもらうことが日常茶飯ことで行われる。

相談する際のプレゼン能力から、聴き上手になり相談されるコミュニケーション・スキル、その内容を整理する能力向上にもなる等、お互い日々、いつの間にか切磋琢磨されるのである。

これはものごとに取り組む文武両道のポジティブな姿勢にも多大なる影響を与え、それが知らず知らずに「習慣」として、じわじわと身に沁みてきて、「一生の財産」となるのである。

異なる専攻の知的仲間(学友)と寝食を共にすると実際、下記のような会話が日常でなされる。

経済学を専攻していた筆者は、投資についての本も読んでいて、そこには当然、「ポートフォリオ」という言葉が出てくる。教授に提出する宿題には、投資の王道として、それなりに「分散」したものを準備し作成する。

そんなことを考えながらカフェテリアで食事をしていると、アメリカ人で写真のコースを取っていた寮友が隣に座り、興味深そうに、投資の話を聴いてくる。

(同じ歳の全く異なる分野の友達に分かり易く説明すること自体、もの凄く勉強になる！)

そして、彼が言った言葉。「へえ〜、分散するんだあ〜！」と。

写真のコースでは、自分の得意で強いと思う写真ばかりを集めたのを「ポートフォリオ」と呼んで、その偏ったのを敢えて、自信満々に教授に提出する学生が殆どなのだそう。

そこへ今度はアフリカ人の音楽(ピアノ)のコースを取っている女学生が座り、「さっきから投資の世界の「パフォーマンス」って言葉が聴こえてきているけど、音楽とは真逆みたいネ。そちらの投資の世界は財務諸表とかの数字とにらめっこして結論を発表するって、どちらかといえば左脳の作業が大きいみたいだけど、音楽での「パフォーマンス」って、思いっきり右脳で感じられるまま表現するのが勝負なのよ！」と。

同じ言葉でも、分野によって意味やニュアンスが全く異なると気付かされるのが日常茶飯なのである。

これが、経済的に社会全体が不況な時代の音楽や絵画の国別の類似性比較などにも知的興味の幅が広がるのは言わずもがなである。しかも、昨今は、メールなどの進歩のお蔭で、寮友との何気ない会話を実家とスカイプで、必要あらば、図案付きで話すことも可能になり、リベラルアーツ・カレッジか専門の大学院を卒業されたご両親から、更に参考になる新聞記事や資料などがよく送られてきて、それをもとに、また寝る前に、「それぞれの専門で当たり前としてしょっちゅう使っているモノ・コトに対するリスク」等について寮友と話し込んだりするの日常であった。

IV 日本の旧制高校との類似点

上記の状況と極めて似た環境/制度は、以前、日本にもあった。それは、1950年まで存在した旧制高校である。

彼ら（旧制高校は、全て男子校だった）は、卒業後、帝国大学に入学することがほぼ保証されていただけに、全国の秀才が集まったのは当然であるが、その中で、全寮制であるが故のバンカラな校風で、先輩が後輩の「面倒」を文武両道、しっかり、みっちり指導していたそうである。

具体的には、所属の文理を問わず古文漢文・外国語・文学・哲学・倫理学・歴史学等のいわゆる「教養」を幅広く学んで人格を涵養し、将来の各界の指導者としてのバックボーンを形成していた。

特に哲学は、「デカンショ（デカルト・カント・ショーペンハウエル）」を必読書とし、それらを読んで思案を深め、日夜、議論を好んでいたようだ。それ故、戦後の日本の政治家は、どんな外国の政治家のトップにあっても動じない、「骨太」であったと言われる。

旧制高校に在学していた著名人例としては、第一高等学校だけでも、首相経験者が近衛文麿から鳩山一郎、岸信介、そして福田赳夫に至る9名。経済界も、石川一郎（経団連初代会長、日産化学工業社長）、石坂泰三（東京芝浦電気社長）、植村甲午郎（ニッポン放送会長）、豊田章一郎（トヨタ自動車名誉会長）、今井敬（新日本製鐵社長）、濱口雄彦（東京銀行初代頭取）、高垣勝次郎（三菱商こと社長）、石黒俊夫（三菱地所会長）、川北偵一（日本興業銀行初代頭取）、柳田誠二郎（日本航空初代社長）、城戸四朗（松竹社長）、駒井健一郎（日立製作所社長）、佐藤晴雄（京浜急行電鉄社長）、水沢謙三（東京海上火災保険会長）、津田弘孝（日本交通公社社長）、門脇吉一（サッポロビール社長）、鹿島昭一（鹿島建設社長）、若井恒雄（東京三菱銀行会長）、天羽浩平（日本サンマイクロシステムズ社長）など多業種にわたり、マスメディア・出版業界では、岩波茂雄（岩波書店創業者）、長谷川才次（時こと通信社初代社長）、古垣鉄郎（日本放送協会会長）で、文芸・思潮分野だと、坪内逍遙、尾崎紅葉、夏目漱石、正岡子規、斎藤茂吉、谷崎潤一郎、芥川龍之介、菊池寛、安岡正篤、川端康成、小林秀雄と錚々たる名前が並ぶ。

これらからも旧制高校は、リベラルアーツ・カレッジ同様、幅広い分野でトップになっている方々が多いことが確認される。そして、卒業生同士の絆が固いことも、リベラルアーツ・カレッジと共通している。

（特に10代後半からの少人数で全寮制だと当然の成り行きなのであろうが。）

結局、旧制高等学校は、最終的には全国に39あったが、特に明治期に創設された旧制一高から旧制八高までは、政官界により多くの卒業生を早く送りこんで後発の学校よりも優位に立ったこともあり、特別に「ナンバースクール」と呼ばれ、その数も奇しくもアイビーリーグと同じ8校だった。皆、世間から憧れられる、白線入り学生帽にマント、そして高下駄に象徴される気風だったという。

現在は、もはや大学ではなく、特定の高校レベルで、その文化は継続されているようだ。旧制高校は、一度、入学すれば帝国大学への進学が保証されていたように、現在のそれらの高校は、中高一貫教育の私立男子校を筆頭に、6年間伸び伸びかつ柔軟な教育が行われている。

具体的には、私立では、開成、麻布、国立では筑波大駒場、都立では、日比谷、西などで、その類似点は、校則がほとんどない自由闊達な学風だが、生徒同士で一生懸命、主に勉学において切磋琢磨し、また面倒見が非常に良い先輩を筆頭に学生同士で揉まれることにより、段々と自分の適性を見出していける処なども旧制高校と共通しているように見受けられる・・・。

確かに、人格形成には、特に二十歳前後の若いうちは、学生同士、お互いに寝食を共にする（特に寮生活などの住環境）のインパクトが絶大なのであろう。

更に、旧制高校は帝国大学に入って大人の仲間入りするのに対して、リベラルアーツ・カレッジは大学院に行って専門分野を深める等、次の人生の大きなステップの基礎作りの役割をそれぞれ担っていることと、それが両親も安心できる、都会的刺戟が少なく、勉強に集中できる比較的田舎の、自然は美しいが厳しい環境（雪深い極寒地が多い）に位置しているのも大きな共通点で、それらが深く人格形成にも影響を与えていると思われる。

ところで、現存する上記の条件を目指している大学は日本にも何校かある。筆頭は、三鷹の国際基督教大学(ICU)だが、それ以外に秋田の国際教養大学(AIU)や、別府のアジア太平洋大学(APU)、それに早稲田大(SILS)、上智大学(FLA)なども続いて新しい学部を設立してきている。

その中で、もっとも忠実に、全寮制で、少人数で、ほぼ全ての授業を英語で幅広い分野を関連付けるリベラルアーツならではのカリキュラムを敢行しているのが、筆者もサポートさせて頂いている山梨学院の国際リベラルアーツ学部(iCLA)である。まだ創立4年目だが、今後の日本における開花が楽しみだ。

V リベラルアーツ・カレッジの課題

現在、全米にリベラルアーツ・カレッジは、約 600 校もあると言われているので、抱えている課題も様々であろう。

しかし、上記の原則大学院がなく、教授は研究よりも教鞭を最優先とし、学生数が少なく、学生対教授比率が高い全寮制のリベラルアーツ・カレッジの共通の課題は下記の通りであろう。

まずは、やはり量的に小規模であるが故に、あらゆる意味で「多様化」が限定されること。

そもそも、同年代の学生のみで、大学院生もほとんどおらず、地理的にも大都市から敢えて離れた処に位置していることから、教授以外の一般の大人や、高校生以下の生徒や子供達を含む一般社会からも遮断されてしまっている場合が多い。

筆者が学期中にキャンパスで、赤ちゃんを連れのお母さんを目にした際、なんか「久しぶりに見た小さな人間だ！」という感じがした覚えがある。

人種も、田舎に位置していることが多いこともあり、教授と学生のみで、もうほぼ大人の年齢の大学院生や一般社会の人々と会う機会があまりないため、皮肉なことに、大学が最優先の1つとして目指している「多様化」の実現は容易ではない。

特に東海岸の古くからあるリベラルアーツ・カレッジはどうしても WASP 比率が高く、海外留学生比率もわずか一桁と、他のアイビーリーグ大学の二桁に見劣りする。

同じ東海岸に位置しているアイビーリーグ校等は、やはり大学院があることが大きく、海外留学生の絶対数および学生の国籍の数などが圧倒的に豊富であるのは致し方ない。

もとより、性格的に、あまり他人と交流したり、ましてや注目されるのが好きでないタイプは、没個性が可能な大きな総合大学が向いていると思うが、果たして、それで今後のグローバル社会で「幸せ」な人生を送れる可能性が高いかと言えば、疑問であろう。

情報に関しては、今のネット社会では、もう読み切れないほど入手可能な上、そもそも、日々、教授から吟味された良質の情報の習得と理解が課せられている宿題の山が十二分にあるので、少なくとも、18歳前後からの4年間の学期中くらいは、かえってネットの情報に惑わされなくても良いかと思える。

しかし、将来の専攻によって、メディカル・スクールや、エンジニアリング・スクールなどの特定の大学院に行く場合は、やはりその分野の大学院がある学部の方が、それに直結したコースや実験などの施設が完備され、その大学院の教授との人的コネクションも考慮すると、どうしてもトップのリベラルアーツ・カレッジの例外を除いては多少のハンディがあるのではなかろうか。

今後、さらに重要度が増すデジタル化最先端分野の授業がとれる選択肢も、大学院がないだけに難しいと思われる。しかし、それは短期的には事実であるが、もう少し先を見据えると、そのような最先端な分野は、日々進歩し、今、「最先端」を学んでも、大学院に入学する時、または、その後の社会人として力を発揮できる時には、既に陳腐化されている場合が多いので、それよりも、いっぱい失敗をし、悔しい思いを経て、少しずつでも「バランスよく」、「広く」、そして「関連付け」られる学び方を習慣づけられたほうが、将来の若者（10代後半から）の幸せな人生にはベターかと。

最後に、大学院がない財政的なデメリットは、企業から寄附を募れる研究が少なく、また、インターンの機会も相対的に限られがちであることであろう。

前者に関しては、確かに父兄に経済的負担として重く圧しかかる。具体的には一般にトップ・リベラルアーツ・カレッジの1年間の学費は5.2万ドルとアイビーリーグ8校の平均より若干高く、寮・食費の1.6万ドルを加えると約850万円/年にもなってしまう。

しかし、これも、トップ・リベラルアーツ・カレッジでは、卒業生の寄附や各種団体やNIHやNSHからの資金があり、潤沢な奨学金でカバー可能だそうである。

後者に関しては、原則、優秀なリベラルアーツ・カレッジに行く学生の大部分は、卒業直後（特に理系）か数年後（主に文科系）に、それなりの大学院に行く可能性が極めて高いので、上記の課題は、ほとんど問題ないのがアメリカ社会の現状なのであろう。

今後、しばらくは、このアメリカの「最低学位は修士」との潮流は続きそうで、そうなると、「どうせ専門は大学院で」の前提の下、学部は、「幅広い基礎的なリベラルアーツ・カレッジ」と認識される可能性は高く、その必要性も世界各国から認知され、リベラルアーツ教育の芽は、既に欧州やアジアなどグローバルに育まれてきつつある。

まとめ

リベラルアーツ教育は、現在、日本人の多くに誤解されているように、就活でPRできる「理系も文系も学んだ」という表面的なチェックリストや「クリティカル・シンキングができる」等のスキル取得とは程遠いものである。

理系も文系も関係なく、それぞれを「原材料」として捉えた上で、偏ることなく両方を学び、究極的には、それらから世界に通用するレベルまで徹底的に「読む力」、「理解する力」、「発信する力（聴く力も含む）」、そして特にその3つを習得しておかないとできない「書く力」を培っていくプロセスがリベラルアーツ教育では重要である。

何よりもそのプロセスにより、心からワクワクするほど「楽しい」と思える世界に巡り合い、可能であれば、たとえそのプロセス自体がその時「苦痛」であっても、あまり頭で悲観的に考えないように心身ともに鍛錬された「人生の学びの姿勢の修得」こそが、リベラルアーツ教育が究極的に目指すところなのではないだろうか？

そのための心構えとして、今年度のノーベル医学・生理学賞受賞者の本庶佑先生の挙げておられる「6つのC（Curiosity 好奇心、Courage 勇気、Challenge 挑戦、Confidence 確信、Concentration

集中、Continuation 継続)」の習慣化を目指すのも確かに核心を突いた素晴らしいアドバイスであろう。

「人間とは何か?自分は何者か?」などの哲学的な疑問の解を見つけるための自分の内面の人格形成とその過程と結果によって、「世の中はどうあるべき?」の解として、社会の「表面」でなく、「根っこ」にどんなポジティブなインパクトを与えられるかの挑戦を続けることを善しとすることができるか、なのではないか?

本庶先生が、優れた医学・生理学の研究者として、何年も日々真剣に研究してこられ成果が、がん免疫治療薬「オプジーボ」の開発という形で結実したのは日本が誇れる好例であろう。

そのためには、先人の知的蓄積を継承し、未来を構想する知的活動も必要で、正解のない解を求めにあたり、当然ながら、各学生の様々なIQ、EQや文化背景や家庭環境などを考慮しながら、教えることを最優先にして下さる教授に、なるべく個人教授に近い形で、多層的に教えて貰えるのが理想である。

知的蓄積を「継承する」のには、インターネットやiPadなどの先端技術のツールが便利で、大いに学びの効率化に貢献するだろうが、「構想する」のには、少人数の授業でのグループディスカッションで発言しあったり、教授との密なQ&A等を通して、日々、教授の個人的経験や智恵から人生観までと交わり合い、そして関連付け合い続けることが必要で、その時にこそユニークな独自のイノベティブなアイデアが閃くことが多い。

(当然ながら、このレベルに到達するには、まだまだAIやロボット相手では限界がある。)

たとえ、そのプロセス(例:教授や他の学生との厳しいやり取り等)が苦しくても、ただただ歯を食いしばってやり続けることにより、何が自分にとって意味があることかを選んでやり続けるマインド・セットと、やりきるために必要な胆力が体得されるのである。

苦労しないですんなりと取得したものは、古今東西、すんなりと抜けていってしまうものだ。人間は現状に対する不満があるから、それをいかに改善するかを考え、そこに向かって努力する。与えられた条件で動作するコンピューターには、そうした現状を改革するという意欲はない。

つまり、リベラルアーツ・カレッジの大きなミッションである「課題を発見」する能力は、現在のコンピューターには備わっていない。ましてや、人の温かさや、火事場のバカ力や、空気を読んだりする能力は、当分、AIやロボットには理解できないであろう。

現実社会のこうしたスムーズでない、「悩み苦しみながらのプロセス」を欠いたままで、多視点的問題を見逃ごす/避けている科学技術の発展の行く末は人間にとって極めて恐ろしい結末になりうる。

そもそも「人にとって、幸せとは何か」にこそ、正解はない。

ただ、例えば上記の本庶先生の「6つのC」を意識しながら、特定の文化や社会的枠組みの束縛から「解放(リベラル)」されて、目の前の課題に、自分が信じ構築中の「軸(価値観と姿勢)」からぶれずに、謙虚に絶えず見直ししながら、今後、AIやロボットなどの最先端の技術変革も含む多様な文化に、前向きに取り組み続けられる人間になっていれば、「これからは人生100年時代」と言われ始めてきたが、その幕を閉じる時に、「自分は幸せ」だったと思える人間になっている可能性は飛躍的に上がると確信する。願わくは、その1人1人の粘り強い価値観とポジティブな姿勢によって、少しずつでもグローバルな社会が「平和が最優先」の世の中に歩み寄っていつてくれることを望む。

□

謝辞：

今回の執筆にあたり、最近の留学体験談を知るにあたり、スワースモア・カレッジを2016年にご卒業された植田龍也君と、ウィリアムズ・カレッジを2015年にご卒業された佐久間美帆さん（彼女のウィリアムズ・カレッジ在学中のブログも含む）とのやり取りおよび、以前、大変にお世話になった栄陽子先生の留学情報サイトを非常に参考にさせて頂きました。改めてここに厚く御礼申し上げます。

執筆者紹介

●肩書

山梨学院大学 国際リベラルアーツ学部 (iCLA) 学部長

補佐

認定特定NPO 法人 Teach For Japan アドバイザー

●略歴

1961年に大阪生まれ。小学校は父の仕事の都合でフィリピンへ。東京の中学校、高校を卒業。大学は米マサチューセッツ州の Williams College を卒業し、1984年に野村證券の国際調査部に入社。その後、外資系金融会社のウェリントン・マネジメンツのボストン本社、東京のゴールドマン・サックスのアセット・マネジメンツ部門やUBS信託銀行などで

活躍した後、チューリッヒ・スカダー・インベストメンツの副社長、プルデンシャル・ファイナンシャル・アドバイザーズ証券社長などを歴任。

2003年に独立。投資会社を東京で経営しながら、2006年から上海に駐在し、経営コンサルタント会社も起業する。

2012年に帰国後、教育業界に転身し、認定NPO法人の Teach For Japan や 山梨学院の新設学部の International College of Liberal Arts (iCLA) のサポートに奔走し、現在に至る。ライフ・ワークは、アジア(特に日本)の若者へのリベラルアーツ教育の啓蒙活動。



当財団では、第一線で活動される気鋭の執筆者に依頼し、時代を拓く提案、提言をニュースレターとして発信しています。ご意見をお寄せください。財団事務局 abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

一般財団法人 未来を創る財団：<http://www.theoutlook-foundation.org/>

© 2018 The Outlook Foundation. All rights reserved.